

繞石見順日記

十六卷

勁草書房

続 高 見 順 日 記 第六卷

1976年 8 月 17 日 第 1 刷発行

著 者 高 見 順
発 行 者 井 村 寿 二

発行所 東京都文京区 振替東京5-175253 株式 勁草書房
後楽 2-23-15 電話(03)814-6861 会社

落丁・乱丁本はお取りかえします。

三陽社印刷・牧製本

© 1976 Jun Takami

Printed in Japan

* 定価は外函に表示してあります。

0395-879900-1836

続高見順日記 第六卷 目次

死生の十字路 四

昭和四十年 四月	5
昭和四十年 五月	71
昭和四十年 六月	177
昭和四十年 七月	217
昭和四十年 八月	255

死
生
の
十
分
路
四

昭和四十年

四月十三日 雨。

日記はやはりひとりりでコツコツと——いや、コソコソと書くべきものようだ。なにもコソコソ書く必要のないことでも、やはりコソコソ書かないと、日記を書くという実感が出てこない。

点滴の中間のたまりにアワがひとつできていたが、上からポツリポツリと、いくら点滴が落ちてきても、そしてそのつど、たまりの注射液がぐらりぐらりとゆれるのだが、そのアワは絶対に消えない。一緒にゆれながら、決してつぶれない。

「しっかり！」

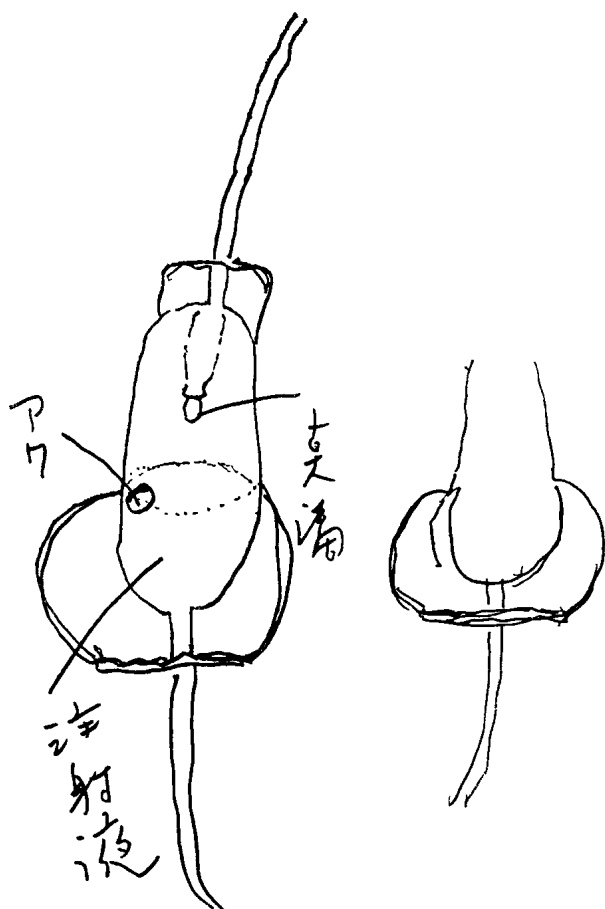
と私は下から眺めながら声援した。そのアワツプの強情さは、あきれるくらいだった。

——こういうことは、やはり、ひとりコソコソ書いているのでないと書けない。

ブドー糖液（それに各種のビタミンを加えた液）の点滴が終り、プラスマにかわっても、アワはまだ

消えずに、がんばっていた。

そのうち、追加のプラスマのとき、どういう加減か、点滴が出なくなった。看護婦さんがいろいろ工



夫してみたがダメ。こっちもくたびたので、やめてもらった。中島先生が直接、静脈に注射。

このさわぎ（？）で、アワのことは忘れてしまった。

今日は痛みどめの注射、なし。

朝五時 眼がさめると腹痛——は例によって同じだが、今日は痛みも軽く、そのうち、背中を押すだけでおさまったので、注射をたのまなかった。

講談社榎本君、過日のお祝いとき、みなに出した品々を、欠席の私のところへ（夫婦二人分）わざわざ持ってきてくれた。豪華な品々である。

野間さんのお嬢さんのところへ、阿南もと陸相の次男が養子に來た。その縁組みの披露宴がこの間おこなわれたのだが、

「結婚披露というだけでなく、次の社長をみなさんに御紹介するということもあったので、ちょっと豪華になったのでしょう」

と榎本君が妻に、照れたように言ったという。榎本君もいいところがある。

石橋君來る。『日記』第八巻の校正持参。序文を書く参考に、とどけてもらったのである。

「中公」常田君ゲラ取りに。

（註Ⅱ中村真一郎氏との「対談」のゲラ。自分で目を通して筆を入れたもの。）

（註Ⅱ『高見順日記』第六回配本第八巻―昭和二十二年三月一日から昭和二十六年五月六日まで―の「序」挿入。）

この病室で日記の序文をこれで三回書く。思わぬ長逗留と相成った。今まで私は自分の現在、つまり病氣のことについてはなにも書かなかったが、この機に一言すれば、ここの専門の照射療法のほか、のどの手術をここで二回やった。病院生活もなくなるわけである。最初の食道ガン手術は一昨年の十月、当時は、実を言くとそんなにいのちがもつとは思えなかったので、自分の日記を刊行する気にもなったのだが、私のいのちはまだしばらくはもちそうだ。

配本順と巻の順とがちがっているので、まだ未刊本が二冊残っているが、今回は日記としては最終巻にあたる。日記刊行という大胆な企画を遂行された勲草書房井村社長にこの際謝意を表したい。なお出版の具体的な面で大変な面倒、労苦をかけた編集部の石橋雄二氏にも心から感謝する。

なおこの第八巻についてちょっと書けば、はじめの頃、本がやたらと出た時期でもあったが、それをまたやたらと私は買いこんでいる。そんなに買ったって読めもしないのだが、当座用というより、本は一生に一度何か役に立てばいいものだという鷗外の言葉にしたがってとにかく買いこんでいたようだ。現在、当時の特に宗教や哲学関係の本がベッドの横に積みあげてあるところを見ると、今になってやはり買いたがが生きてくるようだ。それにしてもこの第八巻をみると、私も全く病氣がちだったという感が深い。

一九六五年四月

昨日につづいて今日も、訳詩集を妻に読ませる。松本さんに渡す前に、やはり通読しておきたかったのだ。

伍一君来る。指圧。

腹痛なし。

カンちゃん来る。橋爪事務所にまた行ってもらって、パンフォリンを取ってきてもらおう。

四月十四日

珍しく朝の腹痛なし。

朝 大便。ちょっと固くて、すっかり疲れた。その疲れのためか、食欲なし。食欲といったって、胸の穴から入れる朝の營養食を、いつも「吸いのみ」いっぱい口からのんでいたで、それを今朝も飲みもうと思ったが、のむ気がしない。

妻、中山先生留守宅へ（買ってお届けするのではない、持参の品のいわれを話して）。昨日 野間社長からのお祝いの品一組を（夫婦分として同じもの二組あり）、先生のお嬢さんに子供が生れたお祝いに……。

天皇陛下が葉山で採集されたカニの図鑑が『相模湾産蟹類』として出版される（陛下が発見された次

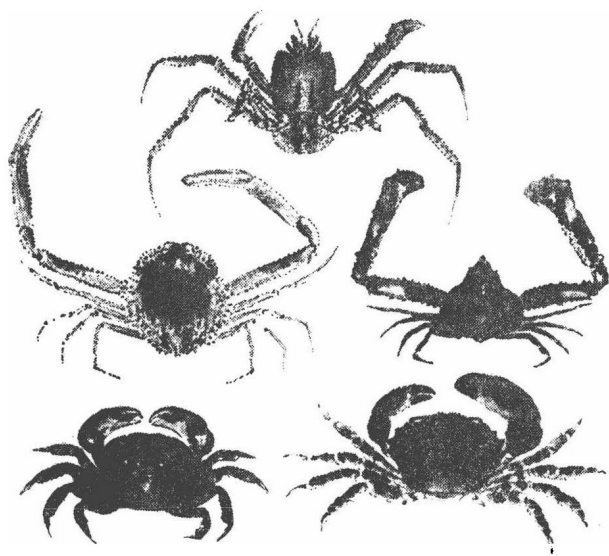
のような新種も収録)。(註Ⅱ五種のカニの写真挿入) それについて陛下の相談相手になっていた「カニ博士」の酒井恆氏と「サカナの博士」末広恭雄氏とが対談をしているその速記が『新刊ニュース』に出ている。そのなかにこんな記事がある。

末広 ……学者でも新種を発見するとうれしいでしょうが、陛下もそのときお喜びになりますか。

酒井 ええ。これが新種だというときは、非常に喜ばれますね。ご採集になってすぐその断定できない場合もありますけれど。

末広 そうと断定したときですね。まあわれわれ下賤な連中、というとおかしいけれども、うれしいときは一杯やろうと思うでしょう。陛下はどのような表現をされますか。

酒井 陛下は全然一杯おやりになるときはなと思いますね。(笑) それから疲れてきても、一服やろうとおっしゃることもないし、ちよっとお茶を一ぱいということもおやりにならない。



末広 たまらないな、それは。(笑)

天皇制の最大の犠牲者はやはり天皇だ。いつも私はこの言葉を口にするのだが、「やはり……」と思う。「一杯やる」という習慣がないだけでなく「一服やる」という習慣もない、実にお気の毒だ。陛下には「臣」があるだけで、「友」がない。一杯やる友人がない。実に気の毒だ。

小野さん来り、とまる。彼女のお茶の先生が作ってくれた漢方薬のセンジ汁持参。さっそくのむ。北条秀司氏より、長文の見舞いの電報。口述の返電。

オミマイ ノ デンボウ カンシヤ」ココニキテ 二ド」アワセテ四ドノシユジユツデツカレハテ
イマヤ ホネト カワ バカリ」ケレドモ ダンジテ ガンバリマス」タカミ

本日も腹痛なし。ありがたい。ただし營養食注入のあと、すこし量が多いと、また、注入の速度が早いと不快感。

夜はネムリ薬(白いツブ二つ)のんで、寝ている間に妻が營養食注入。二時間以上かけて注入。それでも、ぐっしょり汗をかいて(寝ていて発汗)、拭くのに大変だと言う。

夫 婦

紙つて

「高見が元気に
なつて仕事ができ
るためなら、私は
両目を失つても、
両足を切られても
いいと思つてゐるのですけれ
ど」と作家高見順夫人は申され
ました。千葉県稲毛の国立放射
線研究所病院の控え室でのこと
です。夫人のつづらな目には涙
が光り、ほんとうに今にも両目
・両足を差し出して悔いがない
氣遣がみなぎっていました。

「昨年九月に第一回の手術を
うけられてから今日まで、夫と
ともにガンという執拗(しつよう)しつよ
うな病魔と戦つてきた妻の、
ひたむきな愛情に私は深い感動
をおぼえたのです。」「結婚して
こういふものだ、夫婦という
ものはこういうものなのだ」と
私はしみじみ思いました。

——あなたは、すこやかな時
も病氣の時も夫を愛しますか？
と結婚式の司牧師さんはたず
ねます。「愛します」と私もは
つきり答えたのを覚えています
が、これはたしかに容易ならな
いことです。

「何がなんでも結婚したい」と
いうのが、最近の若い女性の方
方の強い願ひであると私は聞い
ています。共学大学を出た女性
たちでも、仕事を持つよりもま
ず結婚との考え方がふえてきて
いることです。結婚に女の

性たちは、まるで不思議なもの
でも見るような目で、女史を見
つめていた光景を私は思い出し
ます。

結婚の楽しさだけを心に描い
てゐるらしいこれらの若い女性
たちは、いつの日かおとずれる
さまざまな試練や苦境を、どの
ように受けとめるのだろうか——
と私はその時ふと考えたので
した。

もうけられるのです。

この間もある若い女性の集ま
りで、講師である独身の一女史
の姿を見ながら、私は多年の風
雪に耐えてきた夫婦というもの
のほんとうの姿を、そこにはっ
しやいます。が、独身も気まま
でいいのですよ」と語りかけ
たのに対して、集まつてゐる女
枝佐枝子「婦人公論編集長」

四月十五日

五時半 妻におきてもらい、齒をみがく。

(註＝「中日新聞」4月14日夕刊の切り抜き挿入。)

パンフォリンをのみ、クズ湯をのみ。

朝刊を見る。今まで新聞を読むということは不可能だった。今でもまだ、通読ということではない。バラバラと眼を通すだけ。それが今までできなかった。手にすることさえできなかった。

今日、「読売」の投書欄「赤でんわ」の投書と、「毎日」の記事が眼にとまる。



「拝啓 自由な子どもがあり、いろいろ手をつくしましたが、すっかりしません。直子さんの行かれた別府整肢園での治療状況を見て、私だけでなく、こも、このために夜に昼に、原稿用紙とこり組んでおいでようですが、サラリーマンには高根の花です。子に対する愛情も結局は金銭で評価されるのかと考えると、子どもに申しわけないとしみじみ思われてきます。(東京都大田区山王三の

まいた水 況を見て、私だけでなく、こも、このために夜に昼に、原稿用紙とこり組んでおいでようですが、サラリーマンには高根の花です。子に対する愛情も結局は金銭で評価されるのかと考えると、子どもに申しわけないとしみじみ思われてきます。(東京都大田区山王三の

上勉氏の愛娘直子さんが、九州・別府の整肢園で治療を受けている様子がある婦人雑誌のグラビアで拝見、医師の熱意と母親の愛情で、六か月の期間中には歩行ができること、およろこびにたえません。

九州・別府の整肢園で治療を受けている様子がある婦人雑誌のグラビアで拝見、医師の熱意と母親の愛情で、六か月の期間中には歩行ができること、およろこびにたえません。

九州・別府の整肢園で治療を受けている様子がある婦人雑誌のグラビアで拝見、医師の熱意と母親の愛情で、六か月の期間中には歩行ができること、およろこびにたえません。

九州・別府の整肢園で治療を受けている様子がある婦人雑誌のグラビアで拝見、医師の熱意と母親の愛情で、六か月の期間中には歩行ができること、およろこびにたえません。

九州・別府の整肢園で治療を受けている様子がある婦人雑誌のグラビアで拝見、医師の熱意と母親の愛情で、六か月の期間中には歩行ができること、およろこびにたえません。

九州・別府の整肢園で治療を受けている様子がある婦人雑誌のグラビアで拝見、医師の熱意と母親の愛情で、六か月の期間中には歩行ができること、およろこびにたえません。

九州・別府の整肢園で治療を受けている様子がある婦人雑誌のグラビアで拝見、医師の熱意と母親の愛情で、六か月の期間中には歩行ができること、およろこびにたえません。

九州・別府の整肢園で治療を受けている様子がある婦人雑誌のグラビアで拝見、医師の熱意と母親の愛情で、六か月の期間中には歩行ができること、およろこびにたえません。

九州・別府の整肢園で治療を受けている様子がある婦人雑誌のグラビアで拝見、医師の熱意と母親の愛情で、六か月の期間中には歩行ができること、およろこびにたえません。

(註＝「読売新聞」の切り抜き挿入。)